

### 「対話型鑑賞」とは？

「対話型鑑賞」は、1980年代にニューヨーク近代美術館で生まれた美術鑑賞の方法で、グループで作品について想像力を働かせながら話し合い、その対話を通して作品の理解を深めていくという方法です。グループでの対話を通して、作品の中にあるイメージを創り出す力、自分で考え、表現し、コミュニケーションする力などが養われます。県内では梅野記念絵画館のほか、信濃美術館（長野市）などでも対話型鑑賞によるガイドが行われています。

実際に体験してみると、誰かと「おしゃべり」をしながら見る作品には、一人で見るときよりずっと多くの発見があるということに気づきます。同じ作品が、これまでとはまるで違うもののように見えてくる瞬間があります。

グループの関係性の中であらわれる発見、別の見方、新たな感動というのが、この対話型鑑賞の楽しさです。



### 「違い」を越えて伝え合うためのポイント

障がいの有無だけでなく、自分との「違い」がある人と出会うときは、緊張するものです。「違い」なんてなかったらいいのに!と思うかもしれません。美術館での「対話型鑑賞」の中から見えた、「違い」を越えるポイントです。

#### 1 一緒に何かをする、共通の目標を持つ

スポーツやゲームを楽しむなどいい機会です。

#### 2 相手のことを想像し、工夫する

伝わっているかな、今どう思っているかな。想像力を働かせましょう。「伝えたい」気持ちで、いろいろな表現や方法を試してみましょう。

#### 3 間違ふことを恐れない

「正解」は一つではありません。わからなければ、「何をして欲しいですか?」「これでいいですか?」と相手に聞いてみましょう。相手と一緒に、今一番良いことを考えていきましょう。



#### さらに……

どんなに身近な人でも、自分と全く同じ人はいません。私たちの毎日は、程度の大小はあれ、「違い」がある人とのコミュニケーションの連続です。障がいのある人も「違い」のひとつ。こうした「違い」は、お互いの理解を阻む越え難い高い壁のように思えることもあります。

今回、グループで絵を見ることで気づいたことがたくさんありました。「違い」がある、ということは、そこに違う感じ方があるということです。「違い」が世界を豊かにします。「違い」をなくそうとするのではなく、認め合いながら「違い」を越えた関係を作っていくことが大切です。障がいのある、あらゆる違いの有無にかかわらず、それが「共に生きる」ということです。そこで必要になるのが、想像力、工夫、コミュニケーション、そして勇気です。

見えない方と一緒に絵を楽しみ、作品を作る中で、たくさんの気づき、発見、そして出会いがありました。今回の体験を通して、中学生は「違い」を越える方法やその楽しさを、知り、感じていたようでした。

協力：東御市立北御牧中学校、東御市梅野記念絵画館・ふれあい館、上小地域障害者自立生活支援センター、東御市社会福祉協議会

発行日：平成27年1月20日 発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 地域福祉部 ボランティア振興グループ  
〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130  
E-mail vcenter@nsyakyu.or.jp URL http://www.nsyakyu.or.jp/



ふっころ

### 視覚障がいがある人と美術館に……見えない人がどうやって見るの？

東御市梅野記念絵画館でボランティアを体験しました。  
東御市立北御牧中学校の皆さん



障がいがある人は、大変。ものすごく苦労してかわいそう。「障がい疑似体験」ではそんな感想がよく聞かれます。けれども、本当にそうでしょうか。障がいがある人は助けを待つばかりの人ではありません。そのことに気づき、「してあげる⇒助けてもらう」だけでない、対等な関係を作るための豊かな出会いを紹介します。



### 事例の概要

#### 見えない人が美術館に？

11月の日曜日、上小地域障害者自立生活支援センター主催による「エンジョイライフサロン」が、東御市の梅野記念絵画館で開催されました。この日は視覚障がいがある人たちが多く参加し、美術館での休日を楽しみました。地元の北御牧中学校の6名の生徒がボランティアとして参加しました。

見えない人がどうやって絵を見るの？それがこの美術館で行っている「対話型鑑賞」です。静かにしなくてはいけないイメージの美術館ですが、今日はグループでおしゃべりしながら絵を鑑賞します。

この絵の中では何が起きている？どんな雰囲気？美術館ボランティアの方に助けて頂きながら、ただ説明するだけでなく、自分が思うことを自由に語り合います。おしゃべりをしていると、自分ひと

りでは気づかなかったものが描かれていること、絵から受ける印象が人それぞれ違っていることに気づきます。自分が受け止めた絵の魅力を言葉で伝える方法も、それぞれ想像力をフル回転させて考えます。

色はどう説明したらいい？大きさは？雰囲気は？好きな絵であればあるほど、どう伝えるか悩んでしまいます。ここではどんな意見も正解。いろいろな感想やイメージが出てきます。

「私は目が見えなくなったことがないから、見えない人がどんなふうにイメージを描くのかかわからない。でも私はこの好きな絵のことを、自由に話せばいいんだと気づきました」と、美術部に所属する女子生徒は話していました。

違いを埋めていくのではなく、違う感覚を出し合うからこそ、物事を立体的に、深く感じられるということ、少しの工夫で、同じように楽しめることを知りました。

#### 「見えない人だなんて意識しなかった」

この日は、陶芸体験も行いました。陶芸では、少しのサポートがあれば、見える人も見えない人も同じように作品を作れます。見えない人と一緒に作品を作った1年生の生徒たちは、どんな手助けが必要か、ひとつひとつその人に確認しながらのびのびと作品づくりを楽しんでいました。「一緒に作っているあいだ、相手が見えない人だと意識しなかった」と話していました。

障がいがある人は「かわいそうな人」ではありません。時にサポートが必要な人。そして「違い」はあっても、同じ時間を楽しめる仲間です。障がいのあるという「違い」をもつ人同士が、「アート」を通して違いを越え、違いを楽しみ、一緒に歩く。そんな体験をすることができました。



### 参加した人たちの感想

初体験！  
みんなで  
おしゃべりを  
しながら絵を鑑賞



広沢さんがこの絵を見るのは三度目。  
一緒に歩く人が違うと、新しい発見があります。



見えない人に  
どう説明したら  
いいかな……。



目隠しをして練習します。

梅野記念絵画館 職員 大塚裕子さん

**作**品そのものは何も語らないけれど、そこから発信しているものを感じるのは人で、人は一人ひとり違っている。だから感じることも違う。それが面白いんです。  
「この人はこんな風を感じたんだ」って受け止めたり、自分の感じたことを表現したり…絵を見て浮かぶイメージは全て正解で、自分が感じたことは全て正しいこと。絵を通して、普段話せないようなことがぼろっと出たり、一緒にいる人の思わぬ面に気づいたり、絵は人と人とをつなぐ媒体なんです。



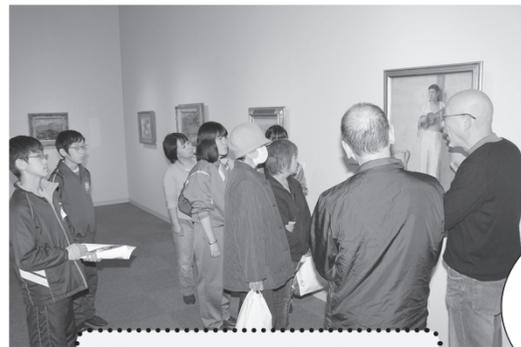
山浦 勉さん

**僕**は明るさはわかるので、美術館の雰囲気もなんとなくわかります。静かで、美術館っぽい匂いや、独特な雰囲気がありますね。作品に光が当たっているのもわかりません。説明してもらって、ああこんな感じかなという情景が浮かんで楽しかったです。



視覚障がいはあるけれど、思考とか感情は見える人と同じ。こちらから特別な配慮をしてください、ってお願いする時以外は、普通に接してほしいですね。今日はそんな風にしてくれて、楽しかったです。

### 視覚障がいがある人の感想



美術館ボランティアの方に対して話を引き出していただいて、絵のイメージをふくらませていきます。

想像力とちょっとの工夫で  
みんなが楽しかった美術館の休日

一緒に過ごして、  
たくさんのことを  
発見しました！

すごい  
作品を作ったね！



君の得意科目は  
なんだい？



作品を作りながらなら  
おしゃべりもしやすいです。

美術館ボランティア 熊野みよ子さん

**そ**こにある絵を、目が見えようがそうでなかろうが関係なく、同じ空間で一緒に楽しめればいいと思います。

対話の方法は見える人同士で見るときも基本的には同じですが、見えない人と一緒のときは、想像力を働かせて、雰囲気や匂い、光の感じという、視覚に訴えない言葉を探してみてください。それを引き出す私たちもとても楽しいですよ。



### 一緒に歩いた中学生の感想

**視**覚障がいがある人と話すのは初めてでした。いい絵だから、そのいいところをちゃんと伝えたいけれど、イメージって一人ひとり違うし、ちゃんと伝わっているか不安でした。

自分は見えなくなったことがないから、見えない人がどんなふうにいるのかわからない。でも、気を遣わずに、思ったままを、わかりやすい言葉で伝えればいいんだなと気づきました。

今日会った見えない人はみんな気さくで、明るくて、絵のイメージもちゃんとつかんでくれて、うれしかったです。



**す**ごく楽しかった。いろいろ話してくれて、質問もしてくれたから話しやすかったです。陶芸も、一つ教えてあげたらあとは全部自分で作ってくれて、障がいがあるから大変なんて、全然感じませんでした。

陶芸家 角りわ子さん

**見**えない方と作品作りをすると、障がいはあるにしても実はそんなに違いはないんだと思います。最初は皆さんが見えないことを忘れて色の説明をして、失礼なことをしたかなと思いましたが、それぞれにその人なりの色の解釈があるのですね。

陶芸では、集中したいときに目をつぶったりすることもありますが、見えない方はもともと指先に集中しているからか、見える方よりいい作品が作れたりします。

中学生に「サポートお願いね」と言ったらちゃんと一緒に作ってくれて、みんな楽しそうでした。ものをつくる、という純粋な作業と一緒に向かうというのは、とてもいいことだと思います。

